

## 1. 症状

**キアリ奇形1型**では、頭痛、後頭部痛、めまい、手足の感覚障害、側彎症、痙縮（筋肉の緊張による歩きにくさなど）が代表的な症状です。

頭痛や後頭部痛は、くしゃみや咳嗽で誘発されることが多いのが特徴的です。

一般には成人になってから診断されることが多いのですが、小児期から症状を出すこともあります。

小児のキアリ奇形1型では年齢によっても症状が異なります。2歳以下では嚥下（飲み込み）障害や胃食道逆流などの症状が約80%に認められるのに対して、3歳を過ぎると合併する脊髄空洞症による症状、頭痛、側彎症といった症状が多くなります。

**脊髄空洞症**も2歳以下では約30%にしか伴いませんが、3歳を過ぎると85%程度と高率に伴うようになります。

**キアリ奇形2型**の多くは乳幼児期に発症しますが、やはり症状は年齢によって異なります。

2歳以下では嚥下・呼吸障害が主な症状で、重症例では気管切開や胃瘻が必要になることもあります。

2歳以上ではキアリ奇形1型と類似した症状になってきます。**脊髄髄膜瘤**の項にも述べられていますが、致死経過をとることもあるため、とくに乳児では症状が出た場合に準緊急的な対応が必要になります。